

教宣 せぶん

ポスティング

名古屋発、東京行き15時47分のもぞみの指定席を予約していました。スケジュール通りの行動を終え、東海地協に戻ってきたのが午後2時。精算作業などを行い、およそ1時間弱、時間が余っていました。「ポスティングをやりましょう」の言葉に「よし、やろう」と全員が反応し、ピラを持って部屋を飛び出していきました。「移動時間があるので3時までにはここに帰りましょう」。そう確認して1000枚から1500枚のピラをそれぞれが手分けして持ち、名古屋の市街地に散っていきました。私たち原告団メンバーだけではなく、他支部の方、地協の仲間も加わってくれました。

全員が地協書記局に戻ってきたのが午後3時5分。持って出たピラの9割方をまき切って帰ってきました。わずか40分から45分のポスティングでしたが、みんなまじめに、手早く、ピラを配りました。あるマンションでは「こういった東京海上日動社が裁判で断罪されたというピラを入れたいのですが、よろしいでしょうか」と管理人さんに尋ねると、管理人さんは中味を読んで「いいですよ。私にも1枚置いていてください」と快く承諾してくれるとともに、記事の内容に興味を示していました。

言葉には出しませんでした。ポスティングを行なった全員に「最後までできるだけのことをやろう」という共通の意思が働いていました。「40分くらいだから休もうよ」と書記局にいて、電車の時間を待っても誰も咎めなかったと思いますが、地方都市宣伝行動の締めくくりとして、3日間の行動を象徴する「ポスティング」でした。

名古屋支店への抗議行動・要請行動では、特に「街行く人が、どう私たちの行動を見るか、どう私たちの訴えを聞くか」という観点で行動しました。こうした抗議行動での支店側の対応の意図は、「旗をかかげ、腕章を巻き、ゼッケンを胸にしている集団に会社を取り囲まれて、会社が困っている」という図柄を描き出そうとします。この対決の構図で悪いのは「社外にいる人たち」という「演出」をしてきます。しかし、生活や雇用を破壊されようとして困っているのは私たちです。もちろん私たちは、旗を掲げ、腕章をし、ゼッケンを着け、ピラを配り、一人でも多くの方に私たちの窮状を訴えるわけですが、そんなありのままの構図を訴えようと特に意識しました。私たちの要請に対して、玄関前でしか対応しない、門前払いと言わんばかりの対応を見せる会社への怒りはしばし胸にしまい、この問題の本質や全体像、私たちがどれだけ困っているかを、マイクを通して訴え続けました。対応に出た支店幹部も、私たちが発する言葉や訴えの前に、返す言葉がないという場面が何度かありました。決して言葉には出ませんが、こうした対応を指示する本社の姿がその苦悶の表情の裏にはっきりと見えました。この3日間の地方部支店抗議行動で感じた怒りは本店前の抗議行動

で、たたかうエネルギーにかえようと思います。